

## オベロンと

## シェイクスピア

平 岩 紀 夫

当時、喜劇に、妖精のオベロンを扱ったのは、シェイクスピア一人ではなかったように思われる。たとえば、Robert Green も、*The Scottish History of James the Fourth*<sup>(1)</sup>と題する喜劇で、オベロンを扱っている。この喜劇では、オベロンは、最初的一幕で活躍するだけで、後の場面には登場しない。グリーンのおベロンは、妖精の王様であり、グロテスクな小人たち (Antiques) と共に、舞台の墓の附近で踊りをおどっているところから劇が始まる。シェイクスピアの「真夏の夜の夢」では、オベロンやその他の妖精が、直接に人間と対話したり交通したりすることはしないけれども、グリーンのおベロンは、直接に人間と対話したり交渉を行ったりする。グリーンのおベロンが対話する相手は、Bohn という男で、彼は、宮廷生活に愛想をつかして、田舎の生活に乗り変えて見たけれども、田舎の人間の方が、宮廷の悪人よりも、もっと性悪であり、田舎の生活は、宮廷生活よりもひどいことを知って、結局、世間嫌いになった男である。ボーンがおベロンに語る話によれば、田舎では、子供の反逆は、宮廷の家来の謀反よりも悪質であり、田舎の女房の毒舌は、戦争よりもひどい。そこで、ボーンは、田舎の生活を放棄して、都会に住みついて、大きい家を持った

---

(1) *Life and Complete Works in Prose and Verse of Robert Green*, edit. by A. B. Grosart, Vol. 13, (Russell and Russell, 1964), P. P. 199 — 211

けれども、あまり快適ではなかった。都会では、友人を求めると、食卓に集まる来客は、彼を喰い物にする来客ばかりであることを知ったからである。また、彼の女房の世間話は、彼の心の祕密を来客にばらしてしまい、親類の者と言え、彼の人生の目的をはぐらかして、失望させるにすぎないことを知ったからである。そこで、ボーンは、宮廷生活も悪いけれども、田舎の生活の方がもっと悪いと結論するに到った。ちょうど、女房が死んだので、彼は、二人の息子を世間に残したまま、自分は墓の中に閉じこもり、野獣に喰われないように、安全に身を守っている。しかしながら、ボーンは、生きている限り、悪い仲間から解放されることはできないと言うのである。ボーンは、こんな訳で、世間嫌いの男となった。オベロンは、ボーンがこのように世間を嫌っているのが気に入って、彼を好きになる。そこで、オベロンは、ボーンを歓迎するためにグロテスクな小人たちを連れてきて、ダンスの楽しい見せ物を見せようとする。グリーンのおベロンも、シェイクスピアのおベロンと同様に、超自然の能力の持ち主であり、ダンスの後では、小人たちに、敏速な機智を与えたり、美しい肉体に変身させたりして、小人たちが王侯の家来になる資格を保証してやったりする。グリーンのおベロンはまた、ボーンの息子には放浪の生活を与え、決して窮乏することがないように保証してやる。ボーンの息子が困窮した場合には、オベロンが必ず助けてやると約束したりする。グリーンのおベロンは、このような超自然の能力の持ち主である。

以上が、グリーンのおベロン舞台の荒筋であるが、これを、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」のおベロンと比較して見る。グリーンのおベロンも、シェイクスピアのおベロンも、共に超自然の能力の持ち主である点では、両者とも共通しているけれども、グリーンは、人間の地上的な単一次元の世界にオベロンを混在させ、オベロン自身の妖精の神祕の世界は作らない。これに比して、シェイクスピアのおベロンは、人間の地上の世界に住みながら、人間の世界とは別の独立したより高次元の神祕の世界を持つ。

そこに入りこんだ人間の目には、オベロンの姿は見えないけれども、また、オベロンは、直接に人間と対話したり交渉したりはしないけれども、人間の行動と内面を見抜いて、自由自在に人間の心を支配できる神に似た神祕の力を持つ。たとえば、Demetrius は、最初の恋人Helena を棄てて、Lysander の恋人Hermia を追いかけているが、オベロンの神祕の国アーデンの森に迷い込む。そのディミートリアスの後を棄てられたヘリナが追いかける。オベロンは、これらの愚かしい恋の繯れを観察しながら、人間の目には姿を現わさず、直接に交渉することもなく、人間世界の不和(discords)と不条理を神祕の力によって和解させる。2幕2場では、ハーミアが父親の命に背き、ディミートリアスとの結婚を拒否して、ライサンダーと駆け落ちしてアーデンの妖精の森に迷い込み、道に迷って疲労のために森の中で寝込んでしまう。舞台は、夜と眠りが支配する世界となる。ライサンダーとハーミアが、このように寝ている側に、ヘリナが、恋人ディミートリアスの後を追いかけて来るが、彼は、ヘリナをふりきって独りで去ってしまう。後に残されたヘリナは、偶然そばに寝ているライサンダーを見付けて、彼を呼び起す。ところが、オベロンは、妖精のPuckに命じて、ディミートリアスの目に魔法の一目惚れの薬を塗らせて、彼が嫌っているヘリナを再び愛するようにして、二人の不和を和解させる筈であったのに、パックが誤ってライサンダーの目に塗っておいたので、ライサンダーは、目を覚めますが早いか、ヘリナを一目見ると彼女に惚れてしまう。途端に彼はハーミアが嫌いになる。このように、オベロンは、神祕の力で、人間には姿を見せずに人間の心を翻弄しながら、最後に和解に導く。一方では、ハーミアは、眠っている間に、夢を見る。彼女の胸に蛇が絡みついて、彼女の心臓を喰いつくす。ハーミアのこの夢には、当時は、予言的な意味があったらしい。と言うのは、Samuel Daniel のパストラルな悲喜劇、*The Queens' Arcadia* (1623)<sup>(2)</sup>にも、同様な予言の夢の話がでてくるからである。この劇も、「真夏の夜の夢」と同様に、恋愛の不和とその和解及びアーカディア的作法と習慣の回復が主要な主題となっている。そこでは、

Dorinda が蛇の夢を見る。彼女は、夢の中で、花を摘みに出かけてゆき、疲れて、小川の側の岸辺で休んでいると、草むらに潜んでいた狡い蛇が忍び寄ってきて、彼女の胸を襲う。彼女はそれを見ても、身動きする力もない。彼女は、じっとしていた。とうとう、蛇は、彼女の胸に喰い込んで、心臓を口にくわえて去る。蛇は、去って行った場所から再び戻って来たように思われた。彼女は、それに気付いて、すぐに立ち上って、非常に悲しみながら、心臓を捜して、見つかるかどうかを調べに行く。あちらこちらと捜しまわったが無駄であった。この劇では、このような蛇の夢を見ることは、縁起が悪いことであり、この夢を見た後では、必らず、腹立たしいことを耳にすることになると解釈されている。ドリндаは、夢が予言したとおり、その日に、後で、恋愛のいざこざで、腹立たしいことを聞かされる。このような蛇の夢の予言は、当時のコンベンショナルな物であったらしく、「真夏の夜の夢」においても、ハーミアは、蛇に心臓を喰われる夢を見た後で、恋愛紛争のために、仲の良かったヘリナとひどい不和に陥り、掴み合わんばかりの争をすることになる。夢の予言はさておいて、この場面は、夜と眠りと夢と神祕の世界であり、目に見えないオベロンの超自然の力が、人間の精神と行動を支配する。そこでは、人間の低次元の世界は、一時的に自己の存在を喪失して、オベロンの神祕の世界に同化され、渾然たる一体をなす。

3 幕 1 場では、アーデンのオベロンの神聖の国に、大工の Quince、織物職人の Bottom、ふいごの修繕屋の Flute、いかけ屋の Snout、指物師の Joiner たちが、月夜の晩にはいりこんで、野外芝居の稽古をする。そこへ、妖精パックが、様々な怪奇な幻に化けて、かれらをおどして退散させる。

- 
- (2) *The Complete Works in Verse and Prose of Samuel Daniel*,  
vol. 3, edit. by A. B. Grosart, (Russell and Russell, 1963),  
P. P. 211 — 300

ボタムが独り残されるが、彼の頭は、ろばの頭に変身される。やがて、妖精の女王、タイタニアが、ろば頭のボタムを寵愛するコミカルな場面が展開される。これは、タイタニアが、妖精の王のオベロンにやきもちをやいて、オベロンの命に背いたために、彼女をこらしめるためのいたずらである。この場面は、妖精の人間との交流を示す物であるけれども、それは、グリーンのオベロンのように、人間の世界に妖精のオベロンが同化されるのではなくて、逆に、妖精の世界に人間が同化され変身されるのである。ボタムのろば変身は、低次元の世界の人間が、高次元の神祕の世界と一体となるための条件である。オベロンの神祕の世界とボタムの地上の世界とが、渾然たる一体となる。このように、オベロンの神祕の世界と、低次元の地上界とが、それぞれ自己同一性を保ちつつ、前者が後者を同化して渾然たる一体となったり、あるいわ、前者と後者が交流したりすることは、Bethell<sup>(3)</sup>が指摘したシェイクスピアの複合意識の原理のパタンの一つであるが、このことに関しては、後で再び言及する。

3幕2場では、ハーミアの見た不吉な蛇の夢の予言が的中する。ディミートリアスは、最初の恋人ヘリナを拒否して、ハーミアを追いかける。ハーミアは、アーデンの森で、ライサンダーの側で眠っている中に、例の不吉な蛇の夢を見て目を覚ますと、ライサンダーは見当らない。彼は、パックに誤って惚れ薬を塗られたために、突然変心して、ハーミアを捨ててヘリナの後を追いかけて立去ったからである。独り残されたハーミアを、ディミートリアスが見付けて求愛するが、ハーミアは彼を拒否してライサンダーの後を追う。後に残されたディミートリアスは、疲労のために眠ってしまう。オベロンは、眠っているディミートリアスの目に惚れ薬を塗り、パックに命じてヘリナを彼の目前に連れてこさせたので、目覚めたディミ

---

(3) S. L. Bethell, M. A., *Shakespeare and the Popular Dramatic Tradition*, (Octagon Books, 1970)

トリアスは、忽ちハーミアを嫌って、再び最初の恋人ヘリナを愛し始める。それ故に、今度は、今迄とは逆に、ライサンダーもディミートリアスと共に、ハーミアを捨てて、ヘリナを追いかけ、激烈な争いが始まる。ヘリナは、かれらのこのようなあまりに急激な変身は、ハーミアたちが共謀して彼女をからかっているのに相違ないと勘違いして、ハーミアを相手にすざましい喧嘩を始める。一時は、舞台は、人間の争いが、オベロンの神聖な世界に取って代ってしまったかの感があるが、オベロンは、人間の目に姿を隠しながら、神祕の力によって人間世界の不和を理性の法に順応した和解に導く。オベロンは、再びバックに命じて、改めて惚れ薬をライサンダーの目に塗らせ、元通りハーミアを愛させる。この喜劇では、オベロンは、神の法の代行者としての妖精である。人間の低次元の矛盾は、オベロンの世界に入ると、忽ち消え失せて、妖精の神祕の世界に完全に同化されてしまい、そこには、再び夜と眠りが支配する。

5幕1場では、舞台は再び昼間の現実の世界に帰る。この劇は、全体として見れば、人間の世界と妖精の神祕の世界との有機的な複合統一体ではあるけれども、それは、現実始まり現実に終る。このことは、シェイクスピアが、地上界の人間を劇の主体的な存在としていることを暗示する。それはそれとして、この劇における人間の世界とオベロンの神祕の世界とを、渾然たる一体ならしめるシェイクスピアの技巧をもうすこし考察して見よう。ちょうど、神の法自体が、人間の知性によっては理解することが不可能であるのと同様にオベロンの神祕の力は、人間の理性によっては理解することはできない。それは、オベロンの姿が、人間の形而下的な目には見えないと言うことによって象徴される。そしてまた、ちょうど、神の法の存在が、人間の信仰による直観によって感じることもできるだけであると同様に、オベロンの神祕の力は、人間の冷徹な理解力を超越した靈感能力によってのみ直感認識できるのみである。シェイクスピアは、この靈感能力を想像力と呼ぶ。この劇の人間たちとオベロンの間には、知性の理

解力では越えることのできない次元の差があり、人間は、想像力と言う名の虹の橋を通してのみ、オベロンの神祕を感じることができるだけである。言い変えるならば、シェイクスピアの想像力こそ、人間の世界とオベロンの世界とを有機的な複合体たらしめる唯一の媒介物である。

しかしながら、人間の世界とオベロンの世界とを渾然たる一体たらしめるのは、単に、想像力の媒介によるのみではなくて、当時の普遍的な宇宙の秩序観、すなわち、存在の鎖の秩序観もまた、次元を異にする二つの世界を複合統一する原理となっている。シェイクスピアは、このような秩序観を、学者の知識としてではなく、劇創造における複合統一の技巧として消化している。例えば、オベロンの超自然的な存在は鎖の最高の地位を占める。しかも、オベロンの妖精の世界自体が、妖精の階級秩序によって成立する。オベロンは、妖精の王として君臨し、女王タイタニアの服従を要求し、パックは、下級妖精として、オベロンの命に従わねばならない。女王タイタニアは、そらまめの花の精、くもの巣の精、蛾の精、芥子の種の精を家来として従えている。次に、妖精の世界の下に、人間の世界が位置する。そこでは、アテネの公爵シーシェースが最高の地位を占める。ボタムたちは、人間の世界の最下位を占める。シェイクスピアは、このような存在の鎖の秩序の法則を劇構造における複合統一の技巧として使用する。シェイクスピアにとっては、秩序の法則は、すなわち、「真夏の夜の夢」の構成上の法則であり技巧に外ならない。秩序の法則とシェイクスピアの劇構成の技巧は一つであり、別々の二物ではない。

さらに、「真夏の夜の夢」の秩序観には、和の法則が一貫している。それは、オベロンが、常に人間の世界に愛と同情を示すことによって暗示される。和の法則は、貴族階級と庶民階級の間にも一貫している。ボタムたちが、芝居を上演するのは、アテネ公爵への敬愛を表明し、公爵の結婚式を祝福するためである。アテネ公爵もまた、ボタムたちの拙くつまらない芝居にたいしても、寛容と愛をもって臨む。このように、貴族階級と庶民階

級とが、和の法則によって統一され、その統一は、同時に、複合的な劇構造の統一でもある。

「真夏の夜の夢」に見られる想像力とか秩序観とか和の法則のような複合意識の原理は、シェイクスピアの劇創造の骨格的な技巧を示すものであり、これだけでは、この喜劇の審美的な真髄に迫ることはできない。この劇の構造の骨組みに肉付けをして、人間の世界とオベロンの神祕の世界を渾然たる一体たらしめるのにきわめて重要な役割、すなわち、 *ornament* の役をするのが心象である。つまり、心象は、この劇の生命とも言うことができる。ここでは、そのような意味での心象の考察を試みる。まず、オベロンの妖精の世界は、主として、パストラル心象と神話的な心象の有機的な粘着体によって形成される。たとえば、2幕1場では、山、谷、灌木の茂み、ばらの花、狩猟の森、花の冠、森、緑の野原、澄み切った泉、きらきら光る星の光、どんぐりの帽子、月の光、コリンとかフィリンダのような牧夫の名前、真夏の泉、牧場、小石を敷き詰めた底の泉、燈心草の生えている小川、渚、妖精の輪舞、風の囁きなどのパストラル心象と、インドの国王から盗んできた美少年に関する神話的な心象、たとえば、その美少年の母親となるべき女が、かぐわしいインドの夜気を浴びながら、妖精の女王タイタニアの宴でさんざめき、タイタニアと一緒にネプチューンの黄色い渚の砂の上に腰をかけながら、波の上を船で旅する商人を見詰めていると、帆が助平風を孕んで腹が脹れ上るの見て、タイタニアと共に笑ったりする神話的な心象、これら二種類の心象の有機的な粘着体から成立している。このようなオベロンのパストラル的で神話的な世界に、ディミートリアスとヘリナが迷い込んできて、地上的な愛の紛争を演じる場面では、オベロンの世界の心象が少なくなり、その代わりに、地上的な心象が多くなる。たとえば、ヘリナは、心変りしたディミートリアスの後を追いかけているが、*‘I am your spaniel; and Demetrius, / The more you beat me, I will fawn on you. / Use me but as your spaniel — spurn me, strike*



me, / Neglect me, lose me; と言う。ヘリナが、スパニエル種の犬になって、ディミートリアスにぶたればぶたれるほど、ますます彼に甘えかかる心象は、地上愛の動物性をあらわす。オベロンの世界と人間の地上愛の世界は、互に対照的にそれぞれの超自然と地上性とを強調し合う。しかしながら、両者の対照結合は、次元を異にする二つの世界の不自然な混合では決してない。シェイクスピアは、オベロンの神祕の世界にも、田舎の人々の苦い現実生活の心象を混入して、人間の現実世界との共通領域を作り、両世界の複合を自然な融合たらしめる。たとえば、オベロンの神祕の世界にも、パックのいたずらで、牛乳のクリームが掬われてなくなったり、石臼をひいている村の乙女がおびやかされたり、田舎の女房が息を切らしながら作ったバターが腐ったり、心なき人々に向って、空しく笛を吹く風が、仕返しに海から病気の霧を吸い上げて、その霧が、陸地に降りて来て、取るに足らぬ川と言う川が、ことごとく、高慢に脹れ上り、陸地を洪水で流してしまうとか、雄牛がくびきを空びきしたり、農夫の汗の結晶である緑の麦が、まだ穂を出さない中に、腐ってしまったり、羊の牧場が、洪水で流されて、空っぽの野原と化したり、家畜が疫病で死んでしまい、その死骸で鳥が肥ったり、緑の草が生い茂り、入り組んだ兎道が消えてしまったりする心象、つまり、田舎の苦い現実生活の心象が混入する。あるいはまた、妖精の神祕の世界にも、オベロンとタイタニアの夫婦喧嘩が起る。それは、人間世界における地上の愛の紛争と照応関係にあり、妖精の世界と人間の世界との複合を自然な融合たらしめるための共通領域となっている。シェイクスピアは、逆に、人間の地上の愛の紛争の世界にも、神話の心象を少数ながらも混入して、妖精の世界と共通した雰囲気を作り、神祕と現実の渾然たる複合を可能たらしめる。たとえば、ヘリナは、ディミートリアスがアポロになって逃げるなら、彼女は、ダフネとなってアポロの後を追いかけると言うような神話心象を用いてディミートリアスに求愛する。

2幕2場では、タイタニアの心象や、妖精の歌と踊りが、神祕の世界を

作る。それは、昼間には、人間の低次元の認識から隠されている世界であり、そこでは、時間的にも空間的にも目に見えない極微の精霊の活動が、夜になると拡大されて、昼間の現実世界に取って代わる。そこでは、妖精の踊りがばらの花の蕾の虫を殺し、こうもりと戦って、その皮の翼をうばい、妖精のころもを作る。ここに迷いこんだライサンダーとハーミアたちは、夜の自然の支配者オベロンの神祕の力によって理性を麻痺され、眠りと夢の假死状態におちいる。かれらは、地上的な自己の存在を一時的に喪失して、神祕の力のなすがままになる。そのようなオベロンの神祕の世界に、3幕1場では、宮廷人と入れ替わりに、ボタムたちが芝居の稽古をするために入りこんでくる。かれらの闖入は、妖精の神聖を汚すものであり、そのまま許されることではない。オベロンは、ボタムを罰するために、また、ボタムの次元の低い自然を妖精の神祕に同化するために、ボタムの頭をろばの頭に変身する。こうすることによって、妖精と人間が、渾然たる一体となり、昼間の人間の物質的な目から見ると、詰まらない自然の微々たる生命が、妖精の神祕力によって拡大されて、超自然の不思議の世界を作る。月の光と馥郁たる花の香、奇怪な幻影、パストラルの歌、妖精の歌と花の床、これらの心象の有機的な粘着の全体が、夜の神祕の生命の活動を創造する。たとえば、空豆の花、くもの巣、蛾、芥子の種などの微小生命が、神祕的に拡大されて、人間と一緒に活動する。蝶々の羽と言えども、扇と化して、眠っているボタムの目から月の光をあおぎ拂う。ここでは、人間とこれらの自然の微小精霊との区別は消失して、両者が渾然たる一体をなす。

ところが、次の3幕2場になると、タイタニアの眠るあずまやとか、オベロンの神祕的でパストラルな歌の世界に、突如として、ディミートリアスとハーミアの地上の愛の粉争の世界が闖入する。ハーミアの "out, dog / out, cur /" とか、<sup>2</sup>"An adder did it: for with double tongue / Than thine (thou serpent /) never adder stung" のような犬とか

蛇の牙とか蛇の二枚舌などの野獣心象や、オベロンが口にする「人間の馬鹿者」のような言葉が妖精の神祕とは対局的な次元の低い世界を作りだす。また、ディミートリアスの「汚い」、「鳥」、「悪意」、「地獄」、「恋敵」、「欺瞞」とか、あるいわ、ヘリナの口にする罵倒の言葉は、人間の醜惡な争いと不和の世界を作る。この争いは、すでに言ったように、バックが、ディミートリアスの目に塗るべき惚れ薬を誤ってライサンダーの目に塗ったために、ライサンダーが突如変心して、ハーミアを嫌ってヘリナを追いはじめたことから始まる。オベロンは、改めて惚れ薬をディミートリアスの目に塗ったので、彼もまた同様にヘリナを追いはじめ、これまでのハーミアをめぐる三角関係が、逆転して、ヘリナを中心にする恋争いとなる。ヘリナは、ハーミアがライサンダーと共謀して自分をからかっているんだと早合点して怒りだす。ヘリナは、ハーミアに喰ってかかり、「共謀している」とか、「偽りの悪ふざけ」とか、「人を傷つけるハーミア」とか、「恩知らずもはなはだしい女」とか、「隠謀」とか、「たちの悪い欺瞞」などとハーミアを罵る。ヘリナのこれらの罵倒の言葉は、醜惡な不和の人間の世界を、オベロンの神祕とは対照的に強調する。一方では、ヘリナを争うライサンダーとディミートリアスの喧嘩は、終に決闘寸前にまで及ぶ。ハーミアも、ライサンダーの突然の変心を怒りだす。しかしながら、シェイクスピアは、ハーミアとヘリナの口論の中にさえ、「you canker blossom」とか、「you acorn」とか、「thou painted maypole」のようなコミカルでパストラルな心象を混入する。そうすることによって、人間の醜い争いの世界が、若干、オベロン化され、妖精と人間の異質的な二つの世界が、不自然な接合にすぎなくなるのを避けることができる。やがて、人間たちのこのような争いは、オベロンの神祕の力によって、和解に導かれ、妖精の神祕界に融合する。人間の争いは、オベロンの魔法によって、解消され、神祕の霧とこだまと眠りの中に溶けこんでしまう。

「真夏の夜の夢」の言葉と心象に関しては、この程度にとどめ、この劇

の夜と眠りと夢とオベロンを主要素とするパタンに言及する。シェイクスピアのオベロンは、夜と眠りと夢と共に存在する。この点で、シェイクスピアのオベロンは、Green のオベロンとは相違する。シェイクスピアのオベロンは、超自然の力を使って、人間の行動を支配し、人間の誤を正し、不和を和に導き、高貴な人々の結婚式を祝賀し祝福する役目をする。つまり、オベロンは、神の力を代行する使者とも言うべき存在である。オベロンに関するこのような筋書を、一種の喜劇のパタンと呼ぶことができるならば、オベロンのパタンによく似たパタンが、Samuel Daniel の *The Vision of the Twelve Goddesses, Presented in a Masque the Eight of January, at Hampton Court*,<sup>(4)</sup> と題するマスク劇に見られる。このマスクは、1623年に出版されたが、「真夏の夜の夢」と同様に、夜と眠りと夢の世界によって形成される。そこでは、女神の使者として、Iris が山から虹の装飾をつけて降りてくる。Iris の役目は、ブリタニアの美しい平和の寺院を訪問することである。Iris は、女神の天下りを象徴する使者であり、神の力を代表する。女神たちは、古代のギリシャの悦ばしい場所、たとえば、Samos, Ios, Paphos には、最早、姿をあらわさない。これらの場所は、今では、野蛮と墮落の場所となってしまったからである。女神たちは、西方の強力なブリタニアの山の上で精気を養うことになった。ブリタニアの山は、平和な楽の音と休息の国である。以上が、このマスクの主要な筋書であるが、Iris は、シェイクスピアのオベロンと同様に、神の力の代表者である。Iris がブリタニアの山上に天降りして、ブリタニアの平和を守り祝福すると同様に、オベロンは、シーシェースの国に妖精の国を作って住みつき、人間の秩序と平和を保護し、領主の結婚式を祝福する。両者は、同質のパタンを持つ。さらに、*The Tempest* の最後の部分

---

(4) *The Complete Works in Verse and Prose of Samuel Daniel*, Vol. 3, edit. by A. B. Grosart, (Russell and Russell, 1963), P. P. 185 — 205

にも、Iris やその他の女神が、結婚式を祝福するために天降りするマスクがある。これらの事実から判断すると、「真夏の夜の夢」のオベロンの筋書は、超自然の力が天降ってきて、貴人の結婚式を祝福するマスクのパターンを持つと言えよう。なお、「真夏の夜の夢」のテキストとしては、Appleton, Morgan 編, "Bankside Shakespeare" , *The Complete Pelican Shakespeare* 及びケムブリッジ版の "The New Shakespeare" を参照したことを追記する。